



愛知淑徳大学

URL=<http://www.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES

Newsletter

第14号

発行年月日：2002年10月28日

〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9

Phone 0561-62-4111 EX 498

FAX 0561-63-9308

E-mail: igws@asu.aasa.ac.jp

2002年6月28日（金）当研究所主催第11回定例研究会を本学にて開催した。「ヘミングウェイのジェンダートレーニング」批評と題し、南山大学外国語学部英米学科の武田悠一教授をお招きして、アメリカ文学と映画批評も含めた文化研究の領域から報告をしていただいた。以下、その報告とその後の討論の概要を紹介する。
その他、今号では、本年度当研究所が主に関わっている研究活動を紹介する。

研究会報告概要 平林 美都子



今回の定例研究会は、南山大学外国語学部英米語学科教授の武田悠一先生にジェンダー構築の失敗例としてヘミングウェイの人生を文学作品と関連づけて話していただいた。以下その概要を簡単に紹介する。

ヘミングウェイの母グレースは、祖母ともども女性参政権運動に参加したフェミニストだった。夫よりも経済力がある母は、当時のジェンダー観からみると女性性の規範には属していなかった。幼少期、母によって姉の双子のような女の子として育てられたヘミングウェイは、こうした強い母に対して愛憎両面的な感情を抱いていたようである。他方父は、当時の女性の病とされていた鬱病の治療「レストキュア」を受けるなど、男性性の規範からはずれていた。この父はやがてピストル自殺をする。

子ども時代に「規範」となる男性性を確立しえなかった彼は、「マッチョ」なアメリカ的男性性を追求するために、4回結婚を繰り返す。最初の

妻ハードリー・リチャードソンは夫に幻想を与える従順な「本物の女」だった。次のポーリン・ブファイファは自立した「新しい女」でありながら、男に従属する妻だった。裕福な両親を持つハードリーやポーリンに、ヘミングウェイは経済的に頼っていた。3番目の妻マーサ・ゲルホーンは作家であり、自立心の強い野心的な女だった。ヘミングウェイはマーサに女友達を見せびらかすなど、妻に対してある種のライバル意識を持っていたらしい。最後の妻メアリ・ウェルシュとの結婚では、彼は自分の都合の良い取り決めをし虐待を加えたという。そのころから彼の鬱状態もひどくなり、最後は（1961）父のようにピストル自殺をした。

結婚前、イタリアで負傷した折り、ヘミングウェイは年上のアグネス・フォン・クロウスキーに「恋愛」めいた体験をしたが、結局成就しなかった。その体験を彼は短編「ごく短い物語」に描くことになる。この短編は、寡黙で自己抑制し耐える男という、男性的価値に重点が置かれている。他方の女性の方は、饒舌にもてあそび裏切る女として描かれている。女に裏切られながらそれに耐えて克服することが真の男らしさだとする理想的男性イメージは、彼の他の作品にも見られるが、結局、彼はジェンダー構築の失敗を隠蔽するために、自分とは違った男性像を作り上げたのだといえるだろう。

1946年から6年半書き続けた『エデンの園』は1986年に死後出版された。おそらくここにヘミングウェイの本当の姿、規範である男性性からはず

れた彼の真の姿が投影されているのかもしれない。

当日の参加者からの「内面化されたジェンダー観を壊すことは難しいのでは」という質問に対して、武田先生は、規範的なジェンダーは引用・反

復によって強制されるものであるからこそ、「強制されていること」を認識するのが第一歩だろうと締めくくられた。自分自身が傷つくことなくしてジェンダー批評はできないのだと思う。

(愛知淑徳大学 文化創造学部 多元文化専攻教授)

「ヘミングウェイのジェンダー・トレーニング」を聴講して

6月28日、武田悠一さんの上記の講演を聴講した。講演の中心は、ヘミングウェイが男性性を如何に構築し、そして失敗したかという事であった。ヘミングウェイは作品内部において、(アメリカ的な)男らしさの典型を描き、そして自らもその事を体現する事によって、男性の価値を追究していたと指摘された。(加えて、自らの「マッチョ」が演技であったとも)



ジェンダーを構築する方法として「作品に書く」という行為がある。虚構化する事である。講演の中で提示された「ごく短い物語」にその方法を垣間見る事が出来た。男(彼)を寡黙に描き、女(ラズ)を冗舌に描いていた。ここにおいて、男/女=寡黙/冗舌という図式を成り立たせている。しかし、ヘミングウェイのジェンダー構築の裏には、ヘミングウェイ自身の経験が敷かれていたとの事であった。史実(?)において、「イタリアの病院で働く看護婦をめぐる物語」においては、性的関係はなく、かなりの部分においてフィクションの手が加えられているらしい。小説(テキスト)を生成する際、虚構の有無を問うのは的外れ(つまり、どれが虚構か否かは問題ではない)と考えられるが、ヘミングウェイのジェンダー

加藤 好広
構築を考える際には、見逃がしてはならない問題と考えられる。ヘミングウェイ(「作家」とされる者全てと言っては大袈裟か)は、小説の中において、描く対象を多少の差はあれ、ジェンダー化しているのだろう。この事は、米国小説だけではなく、日本の古典・近代文学においても同じ事が言える。例えば『徒然草』31段・32段において、女性に関する記述があるが、「今はなき人」や「その人、ほどなく失せにけり」など、何らかの形で虚構化(ジェンダー化)をしているのである。

講演の中で、もう一つ大きなテーマと(私が)感じた事が、ヘミングウェイの小説の映画化の問題である。『ラブ・アンド・ウォー』という作品は、ヘミングウェイの作ったストーリー(小説)他にモデルとされる女性の日記・双方の手紙の記録などを基盤として製作されていると聞いた。内容としては、「悪い女にだまされたkidがmanへと成長していく物語」とのこと。しかし、ここで問題としたいのが、ヘミングウェイの小説に、その他の幾つもの情報を加えるという、製作者側の意図(虚構)があるという事である。たとえば、史実(?)においては、性的関係は存在しないにも関わらず、映画においては存在したとしている。この事は、ヘミングウェイの小説に歩み寄る事により、彼自身を「美化」していると考えられる。又、映画化という行為それ自身にも問題があると考える。それは、後世(と言っても十数年だが)の人が、映画を製作する事によって、ヘミングウェイ作品、更には彼自身のジェンダー化・再ジェンダー化を行うのではないかという事である。「テキストの価値の創造・流通・再生産・再編成といった、絶えざる言説組織化のプロセス」によ

って、(再)ジェンダー化は行われていたと考える。男性性の価値を追究し続けたヘミングウェイは、死後において、彼自身がジェンダー構築されてしまっているのではないだろうか。

最後に、作家・小説(テキスト)を研究する際に、一步踏み違えばジェンダー化・再ジェンダー化の手助けをしてしまうのではという思いが私にはあった。その事を講師である武田先生に尋ねた所、「男性性の構築を認識する行為自体、

大きな一歩である」との返答であった。私自身の質問が悪問(?)であったにも関わらず、的確な返答であった。武田先生のおっしゃる「大きな一歩」を、講演という形で聞けた事自体、私にとっては、「大きな一歩」であったと考えられた。今日、この講演を聴講する機会に恵まれたことに感謝している。今後の研究等に積極的に取り入れていきたい。

(愛知淑徳大学 文学研究科 研究生)

ジェンダー・女性学研究所を会場とする研究会

名古屋アイランド文学研究会は、愛知淑徳大学文学部教員大野光子と名古屋商科大学教員ブライアン・コールボーンを主宰者とし、アイランド文化・文学に関心のある県内の大学教員や大学院生をメンバーとして、三年程前に活動を開始した研究サークルです。メンバーの出身国を問わず、英語を公用語に、夏休み等を除きほぼ毎月1回アイランド文学や映画等について研究発表やディスカッションを続けてきました。メンバーの帰国等により、今年から文化創造学部教員ベヴァリー・カランと大野が主宰者となり、定例会の会場をジェンダー・女性学研究所に移しました。

今年前半は、アイランドの短編映画を材料にして、ジェンダー表象やメディアの果す社会的役割、あるいはグローバリゼーションの問題等について討議してきた。時には海外からのゲストを招いて話を聞くこともあり、10月はアイランド出身でロンドンで活躍中の詩人マッシュ・スィー

大野 光子
ニ - さんのポエトリー・ワークショップを予定しています。今後本会に参加を希望される方は、カランまたは大野までご連絡ください。

The Irish Literary Society meets monthly to discuss aspects of Irish cultural productions such as writing, poetry, translation, and film. At the monthly meetings, members exchange ideas in English after reading a selected work or viewing a film. This year, the meetings have focussed on short films, which have provoked discussion concerning the representation of gender, the role of various media in Ireland, and the local and global positioning of Ireland. Anyone interested in Irish culture, particularly literature and film, is invited to join the meetings and participate in forthcoming sessions (Contacts: B.Curran or M. Ohno).

(愛知淑徳大学 文学部英文学教授)



資料『アグネス・ブラウン』(1999年製作・アイランド女性の生き方を描いた日本未公開アメリカ映画のビデオ・カバー)

本会では、今年度は、商業ベースに乗ることのない長/短編映画を分析し批評することを通して、ジェンダーを含むアイランド文化/社会一般について研究しています。

研究資料のビデオテープ

ジェンダー視点からみた子どもの攻撃性～関係性攻撃～

磯辺 美良

愛知淑徳大学を卒業して4年半が経ちました。その後、2年を宮崎大学で過ごし、現在は広島大学で大学院生をしています。専攻は心理学。学部時代は、当時現代社会学部においでだった國信先生のゼミでジェンダー・女性学を勉強していたので、ずいぶん遠くへ来たなあ、と思います。でも、その頃のスピリットは今でも変わっておりません。ジェンダーの視点を武器に、日々、闘っています(笑)。本稿では、現在の研究テーマや大学での日々について書かせていただきたいと思います。

私の研究テーマは、「ジェンダーの視点からみた子どもの攻撃行動」です。従来、攻撃的で乱暴なのは男の子だと言われてきました。しかし最近になって、女の子も男の子と同じように攻撃性を持っており、ただ、その現れ方が違うのだということが主張されるようになってきました。確かに、男の子は、殴る・蹴るといった人目につきやすい攻撃行動をよく示します。これに対して、女の子は、自分の気に入らない子を仲間はずれにしたり、悪口を言いふらしたり...というような、傍からはわかりにくいタイプの攻撃行動を男の子以上に示すことがわかってきました。こうした攻撃行動を心理学では、関係性攻撃 (relational aggression) と呼んでいます。関係性攻撃は、女性の間では比較的頻繁に見られるのではないのでしょうか。それにも関わらず心理学ではほとんど取り上げられてこなかったのは、心理学者の多くが男性であったことと無関係ではないと思います。

現在、私は、関係性攻撃を頻繁に行う子どもの特徴を明らかにしようと調査研究を進めています。対象は就学前児です。驚かれるかもしれませんが、5歳児の間でも関係性攻撃は見られます。最近の調査でわかってきたことは、関係性攻撃は、比較的对人的に有能な子どもに多く見られるということです。彼ら/彼女らは、友達を作るのが上手ですし、自己主張もできます。これまでは、攻撃的な子どもは対人的能力に欠けているという見方が主流でした。しかしこのことは、身体的な攻撃を示す子どもに当てはまっても、関係性攻撃を示す子どもには必ずしも当てはまらないのです。ただし、関係性攻撃を示す子どもにも欠けている部分はあります。それは、例えば、対人的な葛藤場面での子どもよりも余計に腹を立てたり悲しんだりす

る傾向があることなどです。今後は、関係性攻撃の予防についても考えていきたいと思っています。

さて、これまで2つの国立大学に所属しましたが、いずれの心理学講座にも女性教員は1名しかいませんでした(ちなみに助手や事務職は皆、女性です)。また、女性学の講義や研究所もありません。そういう意味で、(私の知っている)国立大学は遅れています。

また、日々、悩むのは、男性教授との関わり方です。教授に気に入られようと(あるいは尊敬の念を示そうと)男子学生の中には、お茶を入れたり、コピーを取ったりと、いわゆる“女役割”を率先してしようとする人がいます。そうしたなかで、女子学生の選択は一筋縄ではいかない難しいものとなります。なぜなら、女子学生がお茶を入れるのは、“女だから当然”と見なされるからです(下手するとお茶汲み担当にさせられかねません)。まさに、「お茶を入れるべきか、入れないでいるべきか。それが問題だ。」です。お茶を飲みたそうにしている教授に気付きながらも何もするのは、「鈍感な奴だ」と思われる可能性があり癪ですが、仕方がないので、お茶を入れるのは3回に1回ぐらいにしています。私だって、尊敬の念は示したいのですが...。それから、女性教授なら「あなたは、負けず嫌いの意地っ張りね」と評価(?)してくれるところを、男性教授に言わせれば、「男に生まれてこればよかったのに」となってしまう。これも悩みどころです。

そんな“問題”もありますが、朝から晩まで研究や勉強に明け暮れた充実した日々を過ごしています。仲間にも恵まれて、とても楽しいです。私にとって女性学とは、「整体」のようなものだと思います。「整体」をした前と後では、生きる姿勢が変わってきます。しばらく暮らしていると、世間の荒波に揉まれて背骨がまがってきてしまいますが、女性学にボキボキとやってもらおうと、すっきりします。自分は間違っていない。ですから、女性学に出会えたことは本当に幸運であったと思います。最後に、在学生の皆さんへのメッセージ。今、振り返ってみると、愛知淑徳大学は、自由で明るく、風通しのとってもいい大学であったと思います。自分に限界を設けず、好きなことに邁進してください。そうすれば、道は開けると思います。

(本学卒業生 広島大学大学院生 博士課程)

ジェンダー・女性学研究の国際的ネットワーク

National Council for Research on Women (NCRW), New York, USA との連携

アメリカのニューヨークに1983年に発足したNCRW（全国女性研究協議会）は全米のジェンダー・女性学関連領域研究・教育・学位授与機関などを持つ60ほどの大学、研究所をメンバー組織として持つ全米最大のネットワークである。初代会長であったミリアム・チェンバレン博士と私は80年代末に国立婦人教育会館（現 国立女性教育会館）の国際シンポジウムでお目にかかり、日米の女性学情報を交換した。現在は二代目会長のリンダ・バッシュ博士が代表者である。バッシュさんもまた2000年9月に来日し、国連による北京行動綱領（1995年）の見直しのために開催された国連総会特別会期の報告を日本各地で講演した。

その後、私は内閣府から三和総合研究所への委託調査の一環としてアメリカ女性の政治参画状況調査を2001年3月に実施した。そのときNCRWのバッシュさんはたいへんご助力くださり、アシスタントの紹介にはじまり、ワシントン、ニューヨークなどの政党事務局、地方自治体議会議員、女性弁護士、元連邦議会議員の各種事務所、政治参加推進女性組織の代表等を紹介され、面接予約のアレンジまでしていただいた。その半年後、2001年9月11日にニューヨークで多発テロがあり、事務所が世界貿易センターから徒歩7分ほどのところにあるため、しばらく連絡が途絶えたことがあったが直接の被害はなかった。その経験もあり、ロックフェラー財団などから支援を得て、現在「女性と安全保障」について大規模な国際調査を展開している。

アメリカにおける多発テロへの対応もあり、「女性とセキュリティ（安全保障）」というテーマは重要課題である。しかしアメリカ軍がイラクを独自にでも攻撃するといっている現在、アメリカ国内の研究者や市民の間で政府や軍部へこの領域の情報公開要求が今まで以上に高まっている。このような情勢のなかでHuman Security ProjectとしてNCRWが取り組んでいる調査研究の主旨は女性・少女の安全保持が重要政策課題であること、そして戦時下、紛争下などで女性・少女が独特の被害、性的被害などをうける点に注目している。女性・少女への安全保障は人間すべてへの安全保障にもなるはずである。

國信 潤子

このような安全を妨害する要因として市民社会、政治、経済、社会体制などについて多様な恐怖・脅威となる事象がどのようなものであるかについて調査に着手している。今、人間の安全：human securityの概念は国土、領土の安全のみならず、個人としての安全保持の概念へと広がってきている。NCRWの「女性と安全」の新しい調査研究事業では人間としての尊厳の擁護、人間一人一人がどこにいても安全に生活できることを重視し、軍事的安全保障、国家としての保障から視点を広げていることが特徴である。

日本における大学のジェンダー・女性学教育が着実な定着をみる一方、反動的な傾向も見えてきている。ジェンダーや女性学という言葉への意図的な曲解、揶揄なども見られる。このような風潮のなか、アメリカの諸大学・研究所の研究者たちがアメリカ国内の反復的保守化の波、反動による批判の嵐をどのようにきりぬけ、いかにジェンダー・女性学研究蓄積の地歩を固めていったかを私達は学べると思う。

日本からの組織会員は愛知淑徳大学ジェンダー・女性学研究所がはじめてとのこと、欧州、アジアなどとも今後連携を深めたいということである。連携方法としては本研究所の広報資料でNCRWの国際会議などを広報し、また参加する。本研究所の英語版HPを折に触れ、NCRWのHP(<http://www.ncrw.org>)などでアメリカ国内に紹介していくなどの方法をはじめている。その組織の活動主旨は、諸研究機関、大学との協力、共同調査研究の企画、推進。国内外にネットワークを広げ、フェミニスト調査研究、分析を促進し、調査研究、政策、実施の連動を図ることである。また近年の調査として研究者と実践家との乖離の理由を探る、研究者が政策決定者と協力する、若い世代の女性リーダーを育成するなどの内容を目的として広く調査、研究、文献刊行を実施している。研究、刊行物リストなどは上記のホームページを参照していただきたい。

（ジェンダー・女性学研究所所長）

タイ、チェンマイ大学研修を終えて

加藤 尚子

2002年9月5日から15日までタイ、チェンマイ大学での研修とアユタヤ、スコタイ世界文化遺産見学に参加しました。参加者は総勢24名。そのうち3年ゼミ生9名、2年ゼミ生11名、先生と社会人3名です。場所はタイ北部チェンマイという都市で山々に囲まれた高原の中心部にあります。私たちはその都市にある国立チェンマイ大学で6日間研修を受けてきました。どれもこれも鵜呑みにするだけでなく考えさせられるような内容の研修でしたが、その中で私はタイと日本の子供に大きな違いがあることを感じました。

観光客で賑わっているナイトバザールに出かける機会があり、どれも日本よりはるかに安いため夢中で買い物をしていたのですが、その後NGOの人にバザール通りの裏側を見せてもらったときには、想像しきれない信じ難い光景ばかりで一転して何と言っているかわからない状態になりました。幼い子供が愛くるしい目をして花を売り、小学生高学年位の年齢でゲイ・パーで働いているという子どももいるのです。どの子どももゲイの男性の相手をして家族のためにお金を稼いでいるというのです。男児・女児にかかわらず性産業で働かざるをえない子どもがいることは衝撃でした。

日本ではほとんどの親は子どもが生きがいで子のためなら自分で苦勞をかけてでるような親がいるように感じとれるのですが、タイでは子が親を助け、面倒を

見るのが当たり前のようで、学校を卒業し収入を得られるようになったら親に教育費を返し、家にお金を入れる人も多いようです。

チェンマイ大学日本語学科の学生と交流したのですが、とても上手な日本語で「学校で何を勉強しているの？」と聞かれ即答できなかった自分に本当に恥ずかしい思いがしました。同じ大学生なのに意欲の違いの大きさを感じるとともに、何で大学にきたのか自問自答してしまいました。今、研修の事後報告書を皆で協力して作成中です。

タイ研修に参加し多様な価値観、慣習のあることを学習し、知識を得たとともに今後の自分の目標も見つけることができました。好きなことだけに時間を費やせるのは学生の特権だからこれを利用していろいろなことに挑戦し、次に同じ質問をされたときには明確に答えられるように、大学生として恥ずかしくないように、精一杯残りの大学生活を送ろうと思います。



(愛知淑徳大学 コミュニケーション学部3年)

社会人として研修旅行に参加

「タイに、行かない?」そんな一言で、私の夢が実現したのです。ショッピングが主役の観光旅行に不満を感じていた私、“大学生と勉強する”そんな夢のような話が降ってきたのです。そして20年位前より、ジェンダーに関心を持ち“女性たちの生き方”を自分の関心事として考えつつ、仕事をし、多くの女性の生き方を見てきた私は、ここらで中味の濃い勉強をしたいな—と思っていた矢先でした。心配なことはいろいろありましたが、全部、家族のことは夫に頼んで、私の心はタイに向かっていた。

タイは暑い国と思っていた私ですが、バンコクに降り立ったとき余り暑さを感じなかったのは、今年の暑い日本の夏のせいだったかもしれません。先生、生徒、私達社会人、総勢24人は、バンコクに着き、象に乗ったり、世界遺産のあるアユタヤを見学しました。アユタヤに1泊、そして次の日はいよいよチェンマイ大学へ到着です。

チェンマイ大学より3人の教授、そして日本からの留学生で通訳の綾子さんが出迎えてくれました。一緒にバスに乗り込み、それから6日間、タイ社会の近代化の現状についての講義を受けたり、HIV/AIDSの人々をサポートしているコミュニティー・グループ、子供達をサポートしているNGOの人々と情報交流をし

佐々木 康子

ました。また、ストリート・チルドレン達がいるところと一緒に見学し、説明を日本のNGOの人々に聞くうちにタイの社会の問題点がいろいろと見えてきました。

一番心が痛んだのは、やはり子供達の生活が貧困のため学校にいけず、家庭の中にもいられないで、町に出てきても安心できる生活は手に入らないということでした。エイズ、買売春、人身売買、そんな中から抜けられない子ども達がいることを知りました。この子ども達に、夢はあるのでしょうか?振り返って日本の子ども達はというと、管理社会、競争社会の中でもがいているのが現実です。

この旅行が私にとってどんな意味があったのか、今すぐにはわかりませんが、私の脳を少し膨らませてくれたと思います。もう1つ忘れられないのが、チェンマイ大学の日本語学科の学生達、そして夜遅くまでお菓子を食べながら話した愛知淑徳大学の生徒達、本当にありがとう。楽しい思い出です。



(社会人参加者)

21世紀の今、ASUのジェンダー論、女性学・男性学がさらに面白い!!

2002年度/後期

愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業

現代文化（ジェンダー） 2・3年 後期 選択 2単位 星が丘 後期 火曜 1限

講師 / 小倉千加子

【授業の概要】

近代主義の終焉によって展望を見失ったといわれる現代社会の諸問題をジェンダー論の視点から分析し、新たな社会的展開の可能性について学ぶ。

【授業計画】

- 第1講 ジェンダーとは
- 第2講 ジェンダーと近代結婚イデオロギー
- 第3講 ジェンダー規範とダブルバインド
- 第4講 セクシュアリティとジェンダー
- 第5講 身体イメージのジェンダー
- 第6講 拒食症と女性のジェンダー
- 第7講 ジェンダー・アイデンティティの獲得
- 第8講 恐怖症と主婦の病
- 第9講 男性という病
- 第10講 学校で作られるジェンダー
- 第11講 トランス・ジェンダーをめぐる問題
- 第12講 少女漫画に描かれたジェンダー
- 第13講 単位認定試験

【評価方法】

出席状況・試験成績によって総合的に評価する。

【テキスト】

なし

多元文化特殊演習 3年 後期 必修 2単位 星が丘 後期 月曜 3限

講師 / 小倉千加子

【授業の概要】

専任教員が担当し、各論科目及び創造原理科目から各自が選択した領域において、「多元文化講義演習」で得た問題意識や専門的知識を自己学習のレポートに基づく演習によって具体化する。

【授業計画】

自分のジェンダーが学校と家庭によって刷り込まれたハビトウスによって形成されていることを知るために、学校教育と家庭教育の中にあるジェンダー・バイアスを資料を通して発見することを目的とする。

- 第1講～7講 資料の分析
- 第8講～12講 テーマの発見と発表

【評価方法】

出席状況と態度、レポートにより評価

【テキスト】

各回に資料を配布

ジェンダー論 1・2年 後期 選択 2単位 長久手 後期 水曜 3限

講師 / 國信潤子

【授業の概要】

近年、公的文書などにもジェンダー（gender）ということばが頻繁に使われるようになってきた。それは社会・文化的性別という意味である。つまり、社会的に男女に対して期待される異なる役割、意識、行動様式などを指す。新世紀にはいり、従来の固定的性別分業とは異なり、性別にとらわれない新たな社会的役割行動様式の青年たちが増加してきている。そこには固定的な男らしさや女らしさをこえて個性の発揮、能力開発がみられる。これからの経済、社会的自立、生活面での自立などを目指す生き方を共に考える。

【授業計画】

この講座では現代社会におけるジェンダー関係を社会学的な統計データなどで紹介し、現代日本における女性・男性の社会的立場付けを国際比較をしつつ考察する。また各種法制の変革、国際条約・規約などにみるジェンダー関係変容を考察し、日本におけるジェンダー関係の将来を展望する。大半は講義形式である。ビデオ視聴、グループ討論なども一部取り入れる。テキストの他に随時資料を配付する。

【評価方法】

期末のレポート、出席状況、履修態度、授業後の感想カードなどの総合評価による。

【テキスト】

「女性学・男性学～ジェンダー編入門」有斐閣 伊藤國信著 2002年刊

【参考文献・資料】

日本のフェミニズム 全7巻、付録8巻（岩波書店刊）

比較文化特論 2～4年 後期 選択 2単位 長久手 後期 木曜 1限

講師 / 國信潤子

【授業の概要】

この講座では文化比較をジェンダーの視点から試みる。まず、ジェンダー概念とはどのようなものであるか、また異なる社会にはどのように多様なジェンダー関係があるかについて検討する。社会におけるジェンダー・パランスを統計、事例などを材料に、その背景にはどのような法制度、慣習、宗教、カス

トなどの社会規範があるかについて検討する。

【授業計画】

まず、各自の持つジェンダー観念を学生に語ってもらい、それをグループ・ディスカッションの形で共有する。社会統計事例、新聞、などに現れるジェンダー関係に関する情報を批判的に読み解き、ジェンダーそのものの多様性、異文化性を明らかにしてゆく。

またジェンダーに関係する法制、人権規約などについても近年の国連などを通じて出される国際基準がどのようなものであるかについて検討する。各自が担当資料を分析し、報告する形式をとる。

【評価方法】

履修態度、出席状況、期末レポート、報告内容などの総合評価による。

【テキスト】

特になし、随時資料配布

【参考文献・資料】

授業時に掲示する。

比較文化論 3・4年 後期 選択 2単位 長久手 後期 水曜 1限

講師 / 國信潤子

【授業の概要】

なぜ比較文化なのか。それは今日の社会は地球規模で経済・政治・文化等の、社会の変容が進行し、環境破壊、資源有限時代、テロリズムなどの問題はいずれも一國、一社会で解決できる問題ではなくなっているからである。私たちの日常生活は好むと好まざるとにかかわらず、「グローバルイゼーション」が進展している。しかし反面、多様な文化の個性性がこうした世界状況のなかでこそ重要であることも認識されるようになってきている。西欧中心主義から脱却し、動的・相対的文化認識の道を探る。

比較文化の認識枠、文化・文明の概念、単系発展説、多文化圏説、動態的文化理解などいくつかの文化認識枠を検討する。また、具体的事例として南北社会対立の問題点を検討し、開発途上国における開発について国連等のデータをもとにジェンダー分析する。

【授業計画】

大半は講義形式、後半でビデオ視聴をはさみ開発途上国の生活実態を紹介する内容についてジェンダー視点から分析する。グループ討議も取り入れる。

【評価方法】

出席態度、出席カード記述内容、期間中に一回のレポート、期末にレポート提出、以上の4点の総合評価による。

【テキスト】

なし。随時資料を配付する。

ジェンダーと社会1 1～4年 後期 選択 2単位 長久手 後期 火曜 4限

講師 / 國信潤子

【授業の概要】

現代社会において女性と男性の社会的関係は変容しつつある。男女がともに社会参加をして初めて社会における平等が確保できる。この視点から現代社会におけるジェンダー（社会・文化的性）のさまざまな問題を考える。

【授業計画】

男女共同参画社会の形成にむけて日本社会の各方面で努力が続いている。この講座ではグローバル化する国際・民衆交流の領域についてジェンダー（社会・文化的に形成される性別）の視点から開発途上国の現状について学ぶ。地球規模で、南北社会関係（開発途上国と先進国の対立・協力関係）に見られる各種の格差が問題となっている。そこには社会的諸資源の不平等分配がある。この格差是正のため、また国際・民衆交流推進のために国あるいは民間組織による開発支援が行われている。先進産業国から開発途上国に向けて社会的開発支援が行われている。その支援のあり方、文化多様性の確保とジェンダー平等化の試みの関係について考える。

この講座はオムニバス形式であり、社会開発支援の現場で活動する数名の講師による講義形式である。社会開発、国際協力の最前線で活躍する専門科によって現状分析が行われる。テーマとして開発におけるジェンダー、開発実践論、イスラム農村社会、保健・医療現場、外国人労働者などの問題をジェンダー視点から考察する。

【評価方法】

期末レポート、出席状況、感想カード内容、履修態度等の総合評価

【テキスト】

特になし、随時配付

【参考文献・資料】

ジェンダー・開発・NGO（C.モーター東洋経済社）

愛知淑徳大学エクステンションセンター
〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘23
TEL/052-783-1665(直通) FAX/052-783-1621(直通)
受付日時(月～金) 9:00～17:00
ホームページアドレス <http://www.aasa.ac.jp>

愛知淑徳大学図書館にある ジェンダー関連ジャーナル及び図書リスト これらの資料を図書館で活用できます。

1. 英語資料

No.	タイトル
1	Feminist Review
2	Feminist Studies
3	MS.
4	Psychology of Women Quarterly
5	Women's Studies International Forum
6	SIGNS
7	Journal of Gender Studies
8	SEX ROLES(A Journal of Research)
9	Gender & Society
10	Feminism and Psychology
11	Feminist Issues
12	Feminist issues in literary scholarship
13	Journal of Marriage and Family

2. 日本語資料

No.	タイトル
1	女性学
2	女性学年報
3	女性学研究
4	女性情報
5	ウィーラーンWe learn (女性教養)
6	日米女性ジャーナル
7	女性ニュース
8	女性展望
9	女性ライフサイクル研究
10	国際女性
11	WINET情報
12	海外子女教育
13	日経WOMAN
14	ジェンダー研究

愛知淑徳大学 ジェンダー・女性学研究所主催シンポジウム

大衆文化の代表である映画の表象/表現は社会秩序をどのように反映しているのでしょうか。権力を持つ者、持たない者へと位置づける政治的/社会的構造に、映画はどのような役割を持っているのでしょうか。表象の政治的な特質を分析することから、映画が私たちに与えている影響を考えてみたいと思います。

**テーマ：セクシュアリティ/ナショナリティ/人種から映画の表象/表現を考える。
ほら、けっこう、社会が見えるでしょ。**

日時 2002年12月7日(土) 午後13時30分～16時30分

場所 愛知淑徳大学 長久手キャンパス ECsホール

電話 0561-62-4111

パネリスト

岩田和男さん 愛知学院大学情報社会政策学部教授
著書『異文化への視線』名古屋大学出版会

鵜殿えりかさん 愛知県立大学文学部英文学科教授
共著『ジェンダーはこえられるか 新しい文学批評に向けて』彩流社

外岡尚美さん 青山学院大学文学部助教授
共編著『境界を越えるアメリカ演劇』ミネルヴァ書房
「*ビデオによる映像紹介をしながら発表する予定です。」

コーディネータ 平林美都子 愛知淑徳大学教授 参加料 無料

愛知淑徳大学 ジェンダー・女性学研究所

〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9

FAX: 0561-63-9308 TEL: 0561-62-4111 (内線498) E-mail: igws@asu.aasa.ac.jp 担当 山田 清美

申し込み方法、ハガキ・FAX・E-mailにて住所・氏名・電話番号を記入の上お申し込みください。

尚、当日参加も可です。

交通案内

名古屋駅(JR)から、地下鉄 東山線に乗車する。本郷駅で下車(所要時間約25分)市バスに乗車する。

本郷駅(市バス乗り場から) 猪高緑地(いだかりよくち)

愛知淑徳大学正門前(終点) homepage:URL=http://www.aasa.ac.jp/org/igws/index.html

編集後記



今年は、人文系とビジュアル系のジェンダー分析に焦点を絞り、多様な領域からの研究を今後も進めていきたい。

ASU・IGWS2002年度
運営委員：石田好江、岡澤和世、國信潤子(所長兼)、富安玲子、平林美都子
スタッフ：山田清美